河合敦先生の

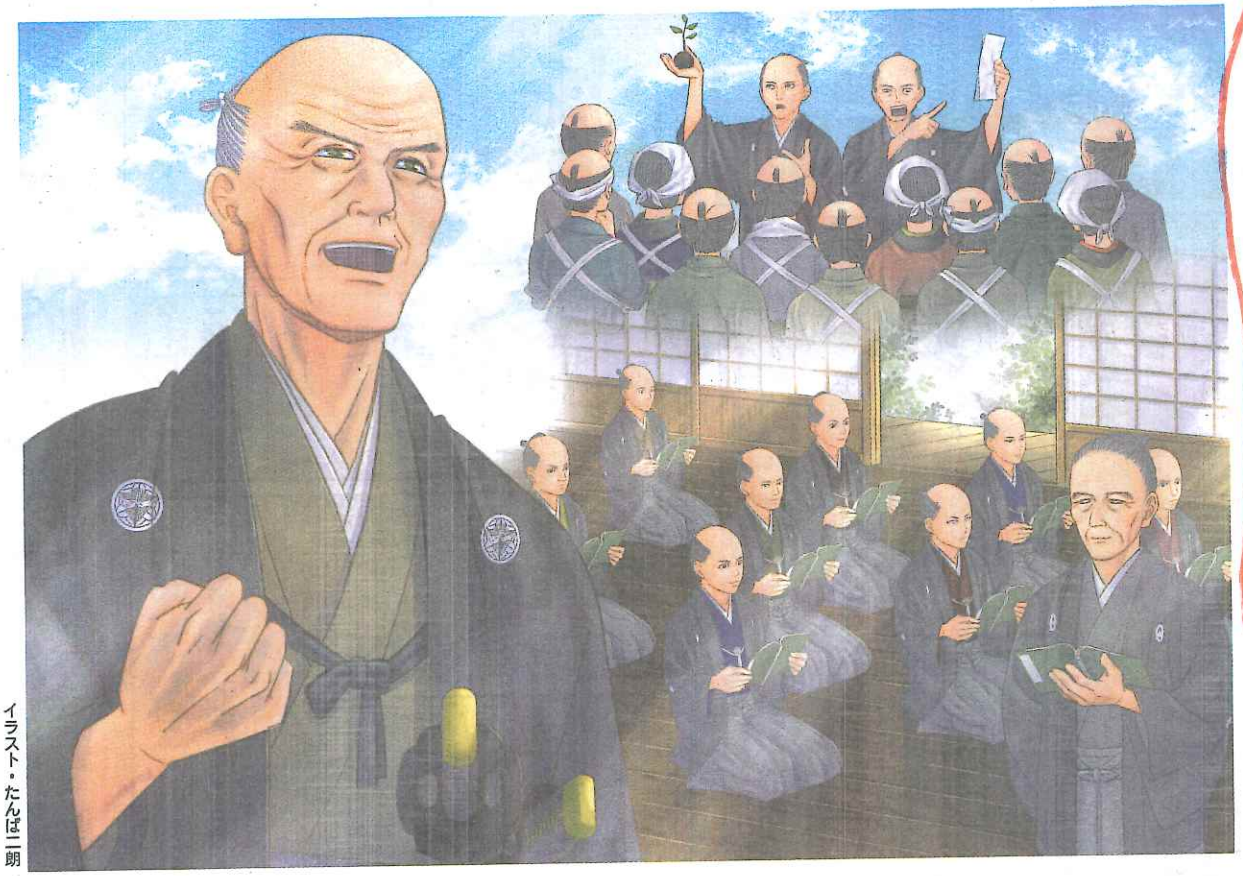
日本史を織りなす人物

上杉鷹山

江戸時代に米沢藩（山形県南東部）をおさめた大名が上杉鷹山（治憲）です。上杉家の領地はかつて120万石でしたが、15万石に減り、商人らからの借金がふくらんでいました。藩主の重定は政治をとりおこなう自信をなくし、養子の鷹山にその座をゆずりました。

鷹山は17歳のころ、改革に取り組み、藩の財政を立て直そうと心に決めました。神社で「なまけ心が生じたら罰をあたえてください」とちかい、江戸づとめ（江戸におかれた藩の屋敷ではたらくこと）の家臣たちを集め、きびしい倹約を求める法令を出しました。

食事のおかずは一つだけ、質素な木綿の衣服を身につけ、藩主が使えるお金を大幅に減らすなど、鷹山は模範を示しました。ところが、この方針に対して米沢の重臣たちは「なんの相談もなかった」と強く反発。鷹山は



イラスト・たんぱ二朗

なせば成る　改革を進めた倹約家

農村の再建と教育を重視

鷹山がいちばん力を入れたのは農村の再建でした。農民たちは重い年貢をかされ、おさめることができないと財産を取り上げられるなどしていました。鷹山はこうした取り立てを禁止。役人に未納の事情を調べさせ、農民たちの生活が立ちゆく手だても考えました。また、積極的に年貢をおさめさせようと、それぞれの村が納期を決められるようにルールを見直しました。

さらに農業にかんする技術を指導する郷村教導出役という役人を農村に住まわせ、農民たちに正しい教育をほどこしました。

鷹山は教育も重視。細井平洲という学者を招き、すたれていた藩の学校を再興して「興譲館」を創設しました。改革が成功しても、あとにつづく者が有能でなければ成果も台無しになります。財政がきびしくてもお金を惜しまず、一流の学者による藩校を設置したのです。

鷹山は新しい政策をとり入れる前に家臣や領民に説明するようにつとめました。たとえば、その実がろうの原料になるウルシを百万本植える計画を立てたとき、鷹山は役人を村に派遣して利益を説き、1本ごとにお金を出し、枯れたらおぎない、実がなると藩が買い取ると約束したそうです。藩主にそこまでされれば、農民もしたがいますよね。

↑
本日の
NEWS